

## 小泉八雲の生涯

Lafcadio Hearn

小泉八雲は本名をラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) といい、1850年(嘉永3年)6月27日ギリシアのレフカダ島に生まれました。父は英国人チャールズ・ハーン、当時ギリシア駐在の英国陸軍軍医補、母はギリシア人ローザ・カシマチ。2才の時、一家は父の郷里ダブリンに帰りました。その後、両親は離婚し、ハーンは大叔母に引取られて養育されました。英国の学校に在学中、あやまって左眼を失明します。19才の頃渡米、ニューヨーク、シンシナティ、ニューオーリンズ等を転々とします。さまざまな仕事を経て新聞記者となり、翻訳や創作を発表して次第に文名が高くなりました。1890年(明治23年)4月、ハーンは日本にきました。同年9月島根県の松江中学校の英語教師となって赴任しましたが、古い日本のよさと日本人の心情に心ひかれます。松江の人小泉セツと結婚、翌1891年(明治24年)11月第五高等中学校教師として熊本にきました。1894年(明治27年)10月、神戸クロニクル社の記者となって転出、このころ日本へ帰化して小泉八雲となるようになります。1896年(明治29年)9月東京帝国大学の文学部講師となり、1903年(明治36年)まで7年間在職しました。また著作も次々に出版されています。1904年(明治37年)4月、早稲田大学文学部講師となりましたが、同年9月26日、狭心症で亡くなりました。享年54歳。のち彼が日本文化につくした功績によって、従四位が贈られました。墓は東京雑司ヶ谷にあります。法名は「正覚院浄華八雲居士」。

## 参観案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分まで

休館日 月曜日(祝祭日の場合は翌日)

年末年始

入館料 無料

所在地 熊本市中央区安政町2-6

TEL(096) 354-7842

所 営 熊本市中央区手取本町1-1

熊本市文化財課

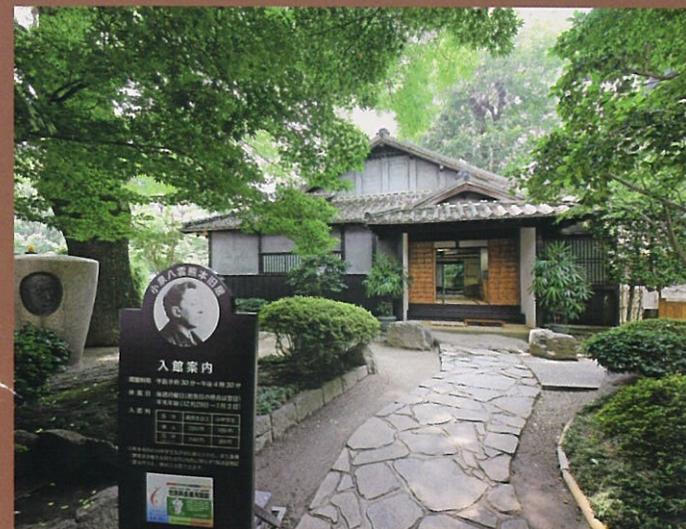
TEL096-328-2740



この旧居は昭和35年解体の危機にさらされましたが、熊本日日新聞社、同社々長小崎邦弥氏、荒木精之氏、丸山学氏などを中心に、小泉八雲旧居保存会が結成され、五高出身者などに呼びかけ、寄付を募りました。翌年旧居の一部を切り取り現在地に移築保存し、昭和43年には熊本市有形文化財に指定され、平成7年に解体復原されました。

市指定文化財

## 小泉八雲熊本旧居



熊本市文化財課

# 熊本におけるハーン

## 手取本町の家

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が夫人とともに松江から第五高等中学校の教師として熊本に到着したのは明治24年（1891）11月19日でした。まず不知火館（後の研屋支店）に旅装を解き、数日後、近くの手取本町34番地赤星晋策氏の家を借りて住みました。借りるにあたって、ハーンは特に注文して神棚を設けます。毎朝この新しい神棚に拍手を打って礼拝し、人力車で学校に通いました。夕陽が好きだった彼は、西と南に縁側のある八畳の部屋を書斎にし机を西向きに置きました。近眼のため机だけは椅子を用いましたが、ほかはすべて日本式で、人との対応もくつろぐのも畳の上でした。



### ・神棚

ハーンが特別に頼んで作ってもらった神棚  
熊本で最初に書いた作品は「家庭の祭壇」でした。



・ハーンとセツ夫人

## 坪井の家

1年後の明治25年（1892）11月、ハーンは坪井西堀端町35番地に転居しました。

このあたりは閑静で、広い庭があり築山を背景に立派な庭石があったといえます。彼はこの築山に標的を立てて弓のけいこをしたりしました。翌年11月には長男一雄が誕生しました。一雄という名はラフカディオに因んだものといわれています。

### ・坪井の家

坪井の家は現在なくなり、跡地に立つ記念碑だけが、ハーンの住んでいた当時を偲ばせます。



・ハーンの長男一雄

ハーンの熊本での仕事はまず「知られざる日本の面影」の執筆と校正でした。続いて「東の国から」「心」の2冊の内容をなす文章が書かれます。彼が作家として世界に知られるようになったのはこの熊本時代の作品によるものです。

☆ハーンは来日してから14年の間に13冊の本を海外で出版しました。

「知られざる日本の面影」上・下  
「東の国から」  
「心」  
「仏の畑の落穂」  
「異国風物と回想」  
「霊の日本」

「明暗」  
「日本雑記」  
「骨董」  
「怪談」  
「日本—一つの試論」  
「天の川綺譚その他」

## 五高とハーン

ハーンの授業は教科書をほとんど使わず、会話中心で、その間に英文学に関する知識をわかりやすく教えるといったものでした。教室の黒板はハーンが書いた文字や絵で埋めつくされたということです。英作文指導にも力を入れ、丁寧に添削をして返しました。この生徒の英作文は「九州の学生とともに」という作品に生かされています。

### ・五高

ハーンがいた頃の第五高等中学校



・ハーンと五高生（前列右から2番目がハーン）

「わたくしが熊本の学生からうけた印象、これはさきわたくしが出雲の生徒たちとはじめて近づきになった時の印象にくらべると、だいぶそこに大きなひらきがあった。……（中略）……ひとつには、かれらが、いわゆる九州かたぎなるものを、まるで正札でもつけたように、じつにははっきりと表示していたという感じが多分にあるのである。」

「九州の学生とともに」の一節

### ・小峰墓地にある石仏

ハーンは授業の合間など暇をみては五高裏手の小峰墓地に散歩しました。

「自分の傍には、石の蓮華の上に加藤清正の時代に座ったままの姿勢で今も座っている仏像がある。この仏の瞑想的な眼光は、半眼にひらいたまぶたの間から、学校とそのさわがしい生活を見下ろし、……」

「石仏」の一節

